

熊野那智大社

熊野那智大社の歴史は約 1700 年前まで遡ることができます。この神社是那智大滝で始まった信仰の新たな礼拝所として建立され、当時から変わらない自然を尊ぶ伝統を守り続けています。また、この神社は毎年 7 月 14 日に行われる松明と扇神輿の行列が見事な「那智の火祭」でも知られています。

かつて日本で一般的だった神仏習合の例に漏れず、那智大社とその隣の青岸渡寺は、その歴史のほとんどの期間において一山の複合的な宗教施設でした。1868 年の明治維新後、新政府が神道と仏教の分離を命じたため、現在、寺院と神社は正式に区別されています。

境内

那智大社の社殿は、大鳥居を北東に構えた中庭を囲むように配置されています。大鳥居から見て左側には社務所と田楽という舞を奉納する舞台があります。鳥居の真正面は宝物殿と御縣彦社と呼ばれる摂社です。右側、中庭の北西の端には拝殿があります。

拝殿の裏手にある玉垣は、普段は一般公開されていません。玉垣内の 6 棟の本殿には 13 柱の神々が祀られています。右から順に、それぞれの本殿の祭神は次の通りです。

	祭神	古事記/日本書紀において同一とされる神
1	飛瀧権現	大己貴命
2	家都御子大神	須佐之男命
3	御子速玉大神	伊弉諾命
4	熊野夫須美大神	伊邪那美命
5	天照大御神	
6	八柱の天神地祇	

このうち、四番目の熊野夫須美大神（くまのふすみのおおかみ）が主祭神です。二番目から四番目の三神は熊野三所と総称され、熊野三山全てで祀られています。

これらの本殿の特徴は、屋根の棟の両端で V 字状に交差させた千木と呼ばれる木製の屋根飾りです。伊勢神宮と同じように、女神（表の 4 と 5）を祀った社殿では千木の先端が水平に切られており、男神の場合は垂直に切られています。

また、玉垣内には八咫烏石もあります。伝説によると、八咫烏は、日本最初の都を開くため、初代神武天皇を熊野から現在の奈良まで案内した三本足の大きなカラスでした。その後、八咫烏は熊野に飛び帰り、くちばしを羽の下におさめて休むと、八咫烏石になりました。熊野那智大社がここに遷されたのは、八咫烏がこの場所に降り立ったためと言われています。

胎内くぐり

中庭の端、拝殿の手前には御神木である大クスがあります。樹齢 850 年以上のこの木は、今では内部の大部分が空洞となっています。木の下部には小さな鳥居が立てられた「胎内くぐり」と呼ばれるトンネルがあります。このトンネルをくぐると幸運が得られるとされています。